

※クリックすると記事のページを開きます。

- ①ヤンゴン大学への派遣留学（2017-18 年）：ヤンゴン日本語教室便り 2
- ②ヤンゴン大学への派遣留学（2019-20 年）：バスケと瞑想—日常のヤンゴン— 3

①ヤンゴン大学への派遣留学（2017-18 年）：ヤンゴン日本語教室便り

2018 年 9 月 30 日

GJO 日本語講師

今井己知子

9 月に学年の年度末を迎えるヤンゴン大学では 9 月 7 日に留学生たちの閉講式がありました。GJO の日本語講座で通訳をして授業補佐をしていた本学ミャンマー語学科からの日本人留学生 4 人も無事留学を終えることが出来ました。閉講式では、男子学生がミャンマー語でスピーチをして 1 年の留学の成果を披露し、女子学生 3 人（このうち 1 人は休学留学）はそれぞれ艶やかな伝統衣装に身を包み激しく華やかなミャンマー舞踊でやんやの喝さいを浴びました。彼らの晴れ姿をどうぞご覧ください。



スピーチの様子



舞踊の様子

②ヤンゴン大学への派遣留学（2019-20 年）：バスケットと瞑想―日常のヤンゴン―

国際社会学部 ビルマ語専攻

恩地隆平

私は 2019 年 12 月から 2020 年 3 月末まで長期交換派遣留学生としてミャンマーの最大都市にあるヤンゴン大学に留学をした。当初の予定では 2020 年 9 月までの予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、3 月末に緊急帰国を余儀なくされた。

4 か月という短い期間で留学体験記を書くことに気が引けるが、この短い期間にすごく濃密な時間を過ごすことができたと考えており、今回はその 4 か月間の一部を見ていただければと思う。



● 学業面

前提として私が留学したヤンゴン大学の授業について簡単に共有する。

授業は中国人留学生と同じクラスで、日本人 4 人に対して中国人は 30 人ほどいた。ビルマ語についてはもちろん、ミャンマーの文化、歴史、地理についても授業があり、ミャンマーに対する理解は深まる内容であった。先生の話すことを丸暗記するという学習スタイルが主であり、自ら考え、答えを導き出すという学習ではなかった。授業時間は 10 時から 15 時までという短めの時間であり、比較的自由に他の活動に時間をつかえた。

停電時以外はエアコンも稼働し、環境としては予想していたほど悪くなかったということが印象としてある。

しかしこれらの授業がなくなるイベントがあった。

それがヤンゴン大学の学部対抗バスケットボール大会である。

● 球技大会？いやそれ以上の熱戦

ミャンマーでスポーツといえばサッカーであると答える人が多い。しかしヤンゴン大学では違った。学生のみならず多くの先生も駆けつけるバスケット大会には大きな注目が集まり、多くの人が詰めかけ、プレーの一つ一つに熱狂し、声援を送っていた。

勝てば歓喜、負ければ涙の熱戦が繰り広げられていた。

• ヤンゴン大学のバスケット

ヤンゴン大学のバスケットボールはツツコミどころが多い。その一部を紹介する。



①「トラベリングはおよそ男子 4 歩から、女子 5 歩から」

バスケットボールの基本としてボールをもって歩いてはいけないという規則があり、ボールをもって 3 歩以上歩くとトラベリングという反則になる。しかし風通しが非常に良く、また基本的に土足でバスケットをする人が多いため、砂や葉っぱにより地面はざらざら。走った後しっかり止まることが困難である。そのためトラベリングに関してはおおめに見る傾向がある。

②「プレー中に犬！？」

チームでシュート練習をしていると、猛スピードで入口からこちらに向かってくる何かが目に入った。そう、野犬である。入ってきた野犬はボールに興味を持ったようだが、ビルマ人のチームメイトは手慣れた感じで追い払ってそのまま練習を続けた。当たり前では



ないと私が思っていたことを当たり前のように周りがふるまう状況が読めずに私の脳はフリーズした。

ミャンマーには野犬が多い。町のいたるところで出くわすが、体育館の中も例外ではなかった。

• 「多国籍軍」 国文学科チーム

独自ルールあり、侵入者ありのヤンゴン大学のバスケットボール。私は中学以降バスケットとは縁がなかったが、学部代表に選ばれた。

私のチームには国文学科、哲学科のビルマ人学生に加え、趣味でバスケットをしていた中国人のおじさんや、兵役終わりの筋肉隆々韓国人たちがいた。一見強そうだが、我々留学生はバスケット経験が乏しいうえにコミュニケーションがとりにくいとい

う大きな欠点を抱えていた。

紙幅の関係上割愛せざるを得ないが、試合を重ねるにつれて互いを信頼できるようになった私たちは、準決勝まで進んだ。準決勝で敗れ、3 位決定戦に進んだ私たちは、残り 5 秒でとったタイムアウトでの入念な話し合いのもと、見事な連携プレー、そして中国人のおじさんによる劇的なシュートが入り、3 位に入賞した。

少し自慢だが、大学の陸上で鍛えた跳躍力とラグビー部で鍛えた体の強さで最多リバウンド賞をいただいた。（写真左）



• 瞑想

ヤンゴンにきて数日たったある日、ビルマ人の友人に誘われ、ヤンゴン最大の名所、シュエダゴンパゴダでの瞑想会に参加した。ひたすら黙って呼吸を観察するだけの時間はこれまで取ったことがなかったが、心身ともにすっきりする感覚があった。仏教について関心があり、卒論のテーマを探していた私は瞑想会を主催した団体を調査対象に決めた。

• 瞑想大会

前述の団体は若者に宗教実践の場を提供することを目的とし、ほぼ毎日シュエダゴンパゴダで瞑想指導を無料でやっている。参加者は平日多くても 10 人ほど、土日は 30 人ほどが集まる。団体設立者の口から瞑想大会を開くという言葉聞いた時も小規模のものであろうと高をくっ



ていたが、当日シュエダゴンパゴダに広がっていた光景は予想をはるかに超えるものだった。

500 人ほどが参加したのである。

そこにはヤンゴン大学の友人を含む多くの若者がシュエダゴンパゴダに集まり、一斉に瞑想を開始した。

気が付くと運営側に回っていた私は参加者に水と朝食を配り続けていた。

なぜこれほどの人が集まったのか。

もちろん仏教への信仰が盛んであることがあげられる。家や寮で毎日瞑想を欠かさないという人も多数おり、大勢の人と一緒に瞑想したかったという声が多く聞かれた。そしてそのほかの理由として、一番人を集めると賞金が出るということも大きく関係したのかもしれない。

• 聖なるお金から俗なるお金へ

上記の瞑想大会で最も多くの人を集めた人物はヤンゴン大学にいた。60 人以上の参加者を集め、賞金の 500000 チャット（日本円で当時 4 万円ほど）を得た学生は寄進旅行を計画し、40 人の参加者とともにヤンゴンから近いバゴへ向かった。僧院をめぐりながら無事寄進をし終えた私たちはバスで帰路についた。

バスの中はライブ状態で半数以上が高速に移動するバスの中で立ち上がり歌を歌っていた。私にもマイクが回ってきたため、ミャンマーで人気の長渕剛による「乾杯」ビルマ語版を歌い車内を盛り上げた。

そんな時だった。バスから変な音がしたのである。徐々にスピードが落ち、しまいには道路上に止まった。バスが動かないまま 30 分以上がたった頃、驚きの知らせが入る。

「運転手が一人で帰った。」

動かないバスに取り残された私たちはバスの管理会社に連絡し、代わりのバスで帰るのだが、今回使ったバス代が無料となった。

余ったお金をどうするかの話し合いの末、カラオケに使われることが決まった。賞金を獲得した学生は、賞金をすべて寄進と寄進旅行のために使うと宣言していたが、思わぬ形で聖なるお金が俗なるお金に変わった。

瞑想会にはその後も参加し、瞑想団体の広報活動にも参加し、信仰心は芽生えなかったものの、もはやミイラ取りがミイラになったような状況だった。瞑想会常連の友人と出家することが決まり、僧院の住職への挨拶を済ませた矢先に新型コロナウイルスの感染懸念で帰国を余儀なくされた。

• 今思うこと

帰国の原因となった新型コロナウイルス、2021 年 2 月からのクーデター、ミャンマーの日常は大きく変わった。ものを売る人々の活気ある声やたくさんの笑顔であふれていた自分のかつての生活圏にはバリケードや民主化を求めるデモ隊の声や鍋をたたく音、そして銃声が響いているという。

ともにバスケットをした仲間の中には国軍に所属する父を持つ者もいた。クーデター以降、仲が良かったチーム内にも亀裂が走っている。SNS 上でチームのグループから国軍の父を持つメンバーの追放などが行われた。

民主派、国軍派、そのような区切りは存在せず、互いに仲良くしていたあの関係はもう戻ってこないのか。国軍の非人道的な発言や行動に関する情報や民衆の被害状況などに日々心を痛めつつ、国家の分断と友人たちの安全を危惧する気持ちが強くある。

分け隔てなくバスケットをしていたあの頃に思いをはせながら。ミャンマーの安寧を願って――



留学や帰国に際して大変尽力してくださった語科の先生方やヤンゴン大学の先生方にしてもしきれない感謝の気持ちがあります。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

これらの活動のほかにも、大食いの特性を生かした大学内の食堂メニュー翻訳活動や、ヤンゴン市内魅力発見活動など、様々なことを行ってきたので、もしビルマ語科で興味のある方はご一報ください。いつでも対応いたします。

最後まで駄文にお付き合いいただき、ありがとうございました。